

カラーの原理

ヘアカラーを理解する上で絶対に外せない「色の原理」の理解。
お客様への施術における薬剤選定・後輩への教育の場面で
まずはこれが理解できているかが最も重要になってきます。

様々な理論を深掘りする前に重要なこと

基礎と実践的な理論を学ぶ

⋮

基礎の基礎を学んで自分のものにしてから
様々な理論を深掘りしていく順序が大切。

狙った色を作れるようになり
カラーを自在に表現できる

⋮

⋮

⋮

⋮

サロンワーク

デザイン

ケミカル

教育

HAIR COLOR ACADEMY

カラーの1剤と2剤の成分



1 剤

染料・アルカリ



2 剤

過酸化水素水

(オキシ)

アルカリカラーの流れ

1

1 剤のアルカリが髪のカチオンを開く

⇒ 薬剤を内部へ浸透させる

2

1 剤のアルカリと 2 剤の過酸化水素水が混ざる

⇒ 活性酸素を発生させる

3

活性酸素が髪メラニン色素を脱色させる

(脱色作用)

4

1 剤の染料と 活性酸素が混ざり、酸化重合を行う

(染色作用)

アルカリカラーの流れ

1 剤



染料

アルカリ

2 剤



過酸化水素水

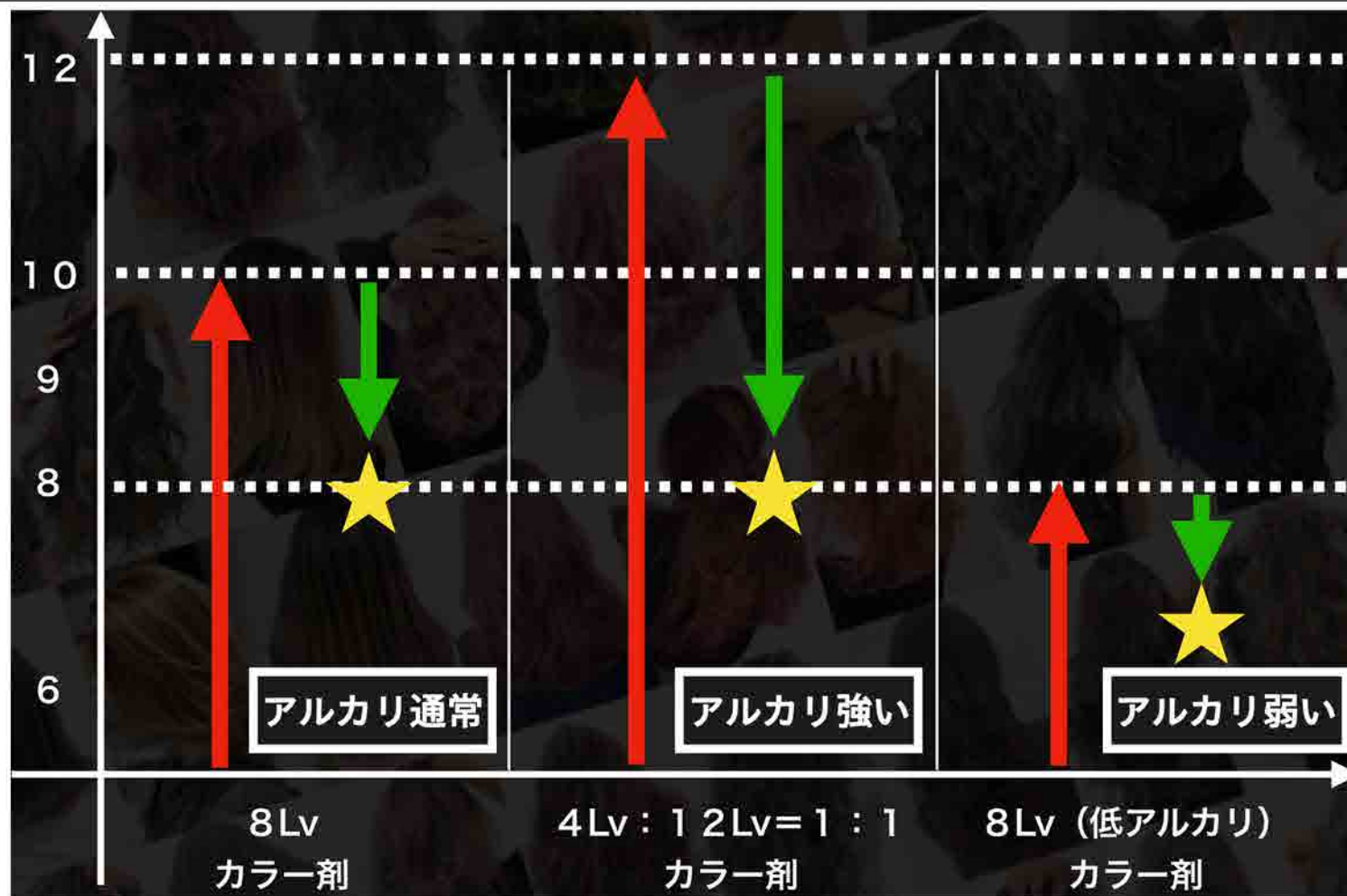
酸化重合

活性酸素

染色作用

脱色作用

髪の色度



アルカリ がとうなると

活性酸素 がとうなるのか？

アルカリが**強い**と

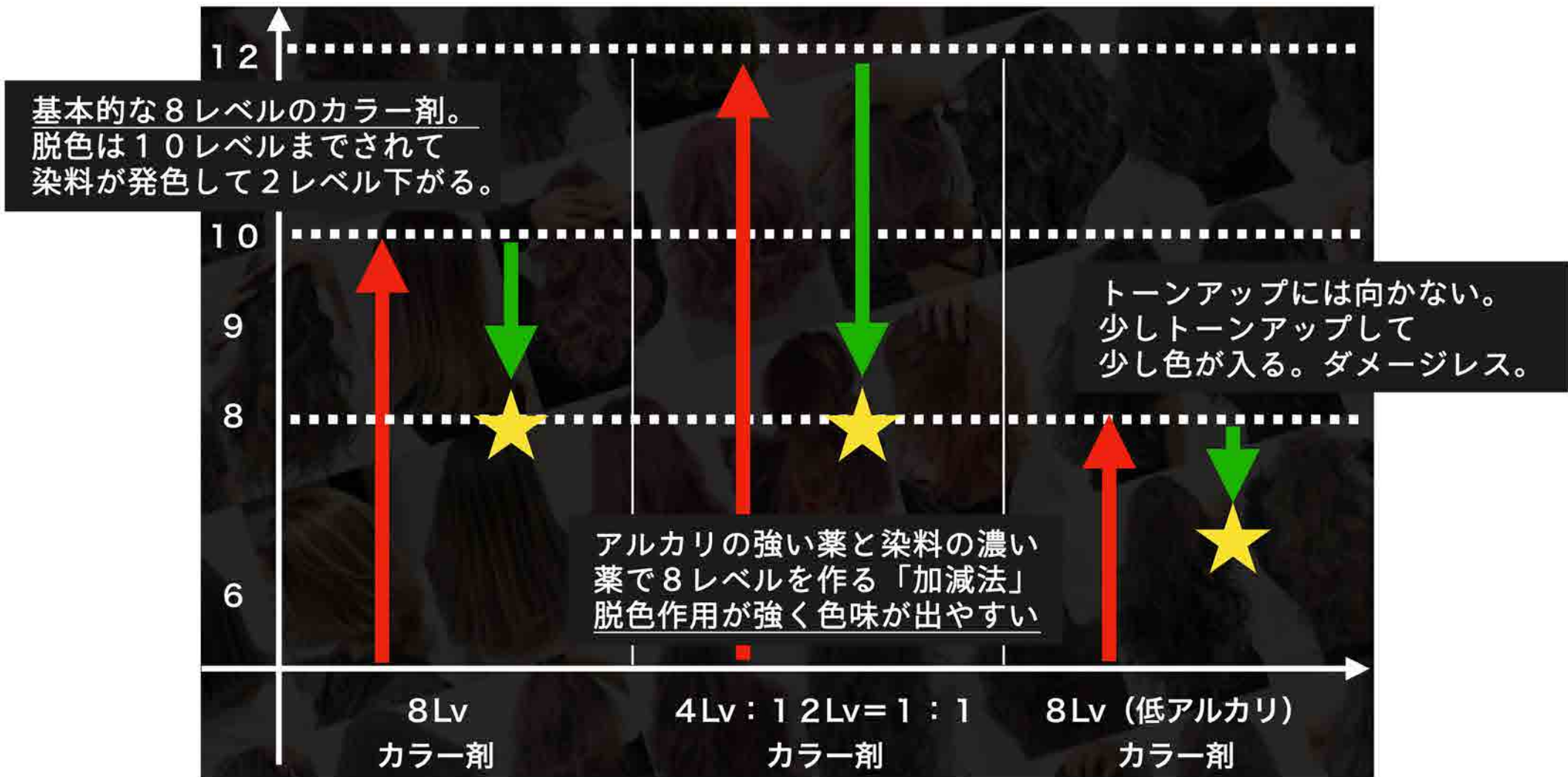
「活性酸素」の発生量も増える
= 脱色・染色も強くなる。

アルカリが**低い**と

「活性酸素」の発生量も下がる
= 脱色・染色も弱まる。

髪の色度

バージン毛に 8 レベルの薬を使った場合 3 パターン



オキシ毎の違い

カラー剤のスペックをどのくらい発揮したいかで使いわけ

濃度が高ければ100%スペックが発揮されるのに対し
濃度が低ければ活性酸素の発生がおさえられる。

	脱色力	染色力	ダメージ	スピード	活性酸素
6%	◎	◎	大きい	早い	多い
4.5%	○	※ ◎	やや大きい	やや早い	やや多い
3%	△	◎	普通	普通	普通
1.5%	×	○	少ない	やや遅い	少ない

※ 「染色」に必要な過水濃度は2%なので、3%あれば染色はされる。

カラー剤の違い

	脱色作用	ダメージ	色持ち	発色
アルカリ	あり	大	1～3ヶ月	酸化重合
低アルカリ	少しあり	中	1～3ヶ月	酸化重合
塩基	なし	※ 小	2～3週間	イオン結合
マニキュア	なし	※ 小	3～4週間	イオン結合
HC	なし	なし	2～3週間	浸透・吸着

※ PHの移動があるのでダメージはゼロではない。

マニキュア・塩基性・HCについて

染まり方

落とし方

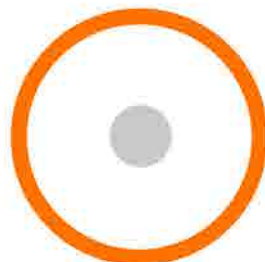
マニキュア



−の電子のマニキュアが
毛髪表面の+の電子に
イオン結合して吸着。

ブリーチ or ティントクリア

塩基性染料

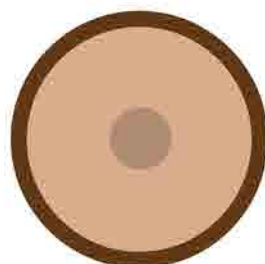


+の電子の塩基性染料が
毛髪表面の−の電子に
イオン結合して吸着。

ブリーチ or ティントクリア
or ライトナー

※ アルカリで消える場合あり

HC染料



浸透・吸着

ブリーチ or ティントクリア
or ライトナー

※ アルカリで消える場合あり

カラー剤の使い分けまとめ

アルカリカラー

明度・彩度・色相を調整しやすい王道

脱色作用・染色作用が行われるので
明度や彩度や色相が調整しやすい

低・微アルカリ

ダメージレスのトーンダウン専用

トーンアップで使用することはない

塩基性・HC染料

ダメージ毛への高彩度専用

※健康毛には色が乗りにくい

マニキュア

健康毛へのダメージレス専用

※ダメージ毛には色が乗りにくい